

DIAMOND LUSH

著／雨街愁介

——ああ、分かっているよ、キング。大丈夫。分かっている。ほら、今俺は意識も明瞭だ。頭も冴え渡っている。本当はこんな言葉残す必要なかったかもしれない。そう思いたい。でもそれはあくまで俺の……そうだ、自意識だ。キング。お前さんのために封筒にダイヤモンドを入れたい。受け取ってくれ。もうすぐ俺には必要がなくなる。——そもそも、俺はどこで間違っただろうな？　ダイヤモンドを盗ったときも、初めて人を殺ったときも、親友の女房を姦ったときも、五つのときに初めてベレッタを握って盗みに参加したときも、俺や一度も間違ったことなんてしたつもりがねえ。本当だ……神に誓って……は、は、そうだ……俺には悪魔しかいねえんだ……なら、悪魔に誓って……キング、俺はここに来たのが間違いだつたんじゃないのか、と思ってる。思ってるんだ。これは本気だぜ。さもなくば——あの日だ、あの日、キング、お前が俺のことを探しに、サウサンプトンの廃工場に来たとき——そうだ、あれが俺の間違いだ。キング、俺とお前は何度も会ったろ、けれどお前は俺に何も教えてなんてくれなかつたよな。でも俺は全部お前に晒したんだ。俺のすべてを見せた。教えた。ああ、せめて……教えてくれ、俺の鼓動が消える前に、さあ、聞かせてくれ。それからいい、鉛を俺にぶち込んで、キング。キング探偵さんよ。お前の本当の名前、それを。俺に。耳元で。囁いて。俺は何度も繰り返すから。

『死とダイヤモンド』（601文字）

